


 書評

傳田健三著

子どものうつ病

見逃されてきた重大な疾患

広瀬徹也

子どもにうつ病はあるのか、あるとしても大人のそれとは違った様相を呈するのではないかなどが長年論議されてきたが、なかなかコンセンサスが得られなかった。その意味で本書ははなはだ挑戦的であり、画期的ともいえる。学術雑誌や気分障害に関する単行書の章には登場しても、子どものうつ病が表題の書下ろしの単行書はわが国では初めてではないかと思われるからである。外国でもそれはまだ少ない部類に属する。専門の児童・青年期領域だけでなく、成人の臨床精神医学でも幅広く仕事をされている傳田健三博士ならではの快挙といえよう。

最近また受診者が増えてきた不登校の子ども達に、軽症ではあっても内因性うつ病を合併している例が多いことに印象付けられた著者が、勤務する北海道大学病院をこの5年間に受診した児童・青年期例のカルテを調査したところ、17歳以下の全410例中111例(27%)がDSM-IVの気分障害に該当したことがこの著作のスタートとなっている。

本書は5部から成り、I. 子どものうつ病とはどんな病気なのか、II. 症例呈示、III. 子どものうつ病の臨床的特徴、IV. 子どものうつ病の治療、V. 子どもと現代社会という表題がつけられている。それぞれの部に「子どもの」とつけられているが、成人のうつ病の説明と同じものが少なくない点は、初めてうつ病全般を学ぶ者以外にはいささか煩わしく、隔靴搔痒の感は否めない。著者のオリジナルはIIの16例の症例呈示とIIIの第10章の児童・青年期の気分障害に関する臨床統計—大学病院における5年間の外来統計—であるが、この部分をもっと書き込んでいただきたかった。

ともあれ、オリジナルなデータ111例中

41.4%が大うつ病性障害、10.8%が気分変調性障害、40.5%が特定不能のうつ病性障害(小うつ病性障害)、双極I型障害2.7%、双極II型障害4.5%という病型別や男女比1対3などの数値からして興味深い。大うつ病が増えた結果、従来この年代に多いといわれた双極性障害の比率が少なくなったのであろう。63.1%が合併障害(comorbidityのこと)を示した事実も外国ですでに指摘されているとはいえ、注目に値する。その内訳は神経性無食欲症、神経性大食症、社会恐怖、強迫性障害、パニック障害、概日リズム睡眠障害という順で多かったというのうなずける。

大うつ病の症状としては易疲労感、気力減退、興味・関心の喪失、集中力減退などの抑制主体の症状と不眠、食欲低下、体重減少などで、成人の場合と共通しているのに驚かされる。したがって、診断的には成人の軽症うつ病の場合以上に、うつ病を疑って積極的に問診すればよいことになる。もちろん、仮面うつ病的に頭痛などの慢性疼痛が前面に出る例も少なくないので、より難しそうであるが、全体には成人との共通性が強調されている。まさに、うつ病は子どもから高齢者まであまねく存在するcommon diseaseであるといえよう。

この本によって、不登校やひきこもり、あるいは摂食障害や社会恐怖にうつ病の関与や合併があることを医療関係者はもとより、学校関係者や家族が知るようにになれば、子どものうつ病の早期発見と治療に益するところ大で、著者の努力が報いられよう。

(神経研究所附属晴和病院)

● A5 266頁 2002 本体3,600円 金剛出版刊